中野裕三著

『国学者の神信仰

―神道神学に基づく考察―』

武田幸也

本書『国学者の神信仰』は、著者の神道神学に関する論考を一書にまとめたものであり、神道神学に関する最新の成果の一つである。神道神学の出発点は、神道指令による、国家と神社との分離に由来する。戦前の神社はあくまで非宗教的存在と位置づけられており、学問として神道神学が自覚的に営まれてはこなかった。このため、戦後、神社神道が一宗教として出発するにあたり、神社神道において神道神学という学問の樹立が一つの課題となったのである。かかる経緯を背景とし、戦後の、神道神学研究の嚆矢として、小野祖教氏の業績があげられよう。次いで上田賢治氏の業績があり、近年では、安蘇谷正彦氏が神道神学に関して積極的に研究を進めている。尚、この三氏の業績以外にも神道神学に関わる業績はいくつか存在するが、とりわけ、この三氏は神道神学という学問の体系化を目指していると

いう点において、他の神学に関わる論考とは一線を画していると評価できよう。しかし、これまでの神道神学に関する研究・議論は、必ずしも活発に行われてきたとは言い難い。こうした状況は、神社神道は宗教か否かという問題や、教祖の存在しない宗教である神道において神学が必要なのか、といった考えが神社神道において根強く存在することに由来しよう。そのような状況下において本書は、久々に神道神学を正面から論じた研究書である。

以下、本書の概要を紹介し、若干の所感を述べたい。

序論　戦後神道神学研究史と本書の課題
第一編　本居宣長の神信仰
第一章　ルードルフ・オットーのヌミノーゼ概念
―本居宣長の「神の定義との比較」―
第二章　本居宣長の神観念
第二編　橘守部の神信仰
第一章　橘守部の神理解
第二章　「顕生魂」説の原由―橘守部の神学―
第三編　鈴木重胤の神信仰
第一章　鈴木重胤と神祇祭祀
―神学確立過程に関する一考察―
第二章　『祝詞講義』と明治期の祝詞研究
第四編　組織神学に基づく神道の神理解

第一章　荒魂考
第二章　〝豊受大神敬祭説〟をめぐって
第三章　多神信仰の論理―国学者の視点―
補論　近代神宮の道程―御巫清直の思想と古儀復興―
結論

内容について述べる前に本書の前提として、上田賢治氏の神道神学について若干述べておこう。これは、本書の序論に記されているように、本書が基本的に上田氏の神道神学の方法論を踏まえて、著されたものだからである。上田神学の特徴とは、神道神学を「組織神学」、「歴史神学」、「実践神学」の三つの分野に分類し、その中核として「組織神学」を重視していることである。「組織神学」は信仰を構造的に捉えることを目的とする。その際、上田氏が重視したのが記紀神話であった。上田氏は、記紀神話を基礎資料として、仮説的に組織神学として、神道信仰の基本構造を論じ、次いで「歴史神学」によって、その信仰を検証する。「歴史神学」は、信仰の歴史的展開の諸相によって、「組織神学」によって論じられた信仰の基本構造を検証することであり、同時に歴史的に展開された信仰が組織神学の視点から、正統な信仰といいうるのかを検証するものである。最後に「実践神学」である。これは、「組織神学」により抽出された信仰の原理を、現在の諸問題に如何に対応せしめるかということを課題とする神学である。

本書の内容は、この上田神学の方法論に従い、「歴史神学」に重きをおいている。その中でも、とりわけ近世国学者の業績を神道神学そのものと位置づけ、国学者の神信仰を検討している。さらには、その「歴史神学」による成果を用いて、「組織神学」における、神道の神理解を論じたものである。

それでは本書の内容について略述しよう。著者は序論において、戦後の神道神学の歴史として、小野祖教氏、安津素彦氏、上田賢治氏、の三氏を取り上げ、三氏がどのような方法論を用いて神道信仰を明らかにしようとしたのかを論じている。これら三氏の具体的な神学論については論考に譲るが、著者は三氏の業績を概観した上で、三氏の共通点として、神学は研究者の信仰を前提としている点、神学の課題を神道信仰のアイデンティティを問うことであると認識している点の二つを指摘している。それを踏まえ、著者は、神道神学を「研究者の信仰を前提として、神道信仰のアイデンティティを理性的・論理的に明らかにすることを課題とする学問」と規定し、方法論として上田神学が最も有効であると述べている。さらに、著者は、本書を貫く問題意識として、二つの点を述べる。一つは、近世国学者の業績が、神道神学という名称ではなかったにしても、

「まさしく今日意味するところの「神道神学」であった」とする認識から、国学者の著作を分析する際には、その神道信仰を重視するという視座を設けること。二つは、信仰が「言語」のみによって表出されるものではなく、「行為」や「視覚」といった異なる表出形態があるという近年の宗教学の成果を援用し、神道神学を論じることである。

第一編では、「本居宣長の神信仰」が論じられている。その内、第一章「ルードルフ・オットーのヌミノーゼ概念―本居宣長の「神の定義との比較」―」では、ドイツの宗教学者オットーのヌミノーゼ概念と、本居宣長の「神の定義」を比較している。かかる方法論は、加藤玄智、原田敏明、安津素彦といった研究者によって用いられてきた。著者は改めて、オットーのヌミノーゼという概念を検討するとともに、この概念と、宣長の「神の定義」との比較を通して、両者が近似する概念であることを論証し、他方で両者の相違点に神道信仰の特徴を見いだしている。ちなみに、ヌミノーゼとは、崇拝対象に対する「宗教感情の非合理的な側面」であり、「厳密な意味に於いて定義することのできないもの、合理的な概念によって指し示すことのできないもの」のことである。

第一編第二章「本居宣長の神観念」では、本居宣長の神観念が中心的に論じられている。第二章における著者の問題意識は、村岡典嗣以来、先行研究において論じられてきた、宣長の「神の定義」に立脚する多神論的神格理解と、絶対神を前提とした神理解という、二つの矛盾する信仰を宣長が有していたという理解に対して、この二つの神理解が必ずしも宣長の神理解において矛盾する物ではないのではないか、という点にある。著者はかかる問題意識から、宣長の畢生の大著たる『古事記伝』稿本の成立過程から、宣長の「御霊の神学」の形成過程を緻密に論じている。この「御霊の神学」の確立によって、宣長の多神論的神格理解と、絶対神を前提とする神理解とが一貫した神学によって形成されたことを論じ、この二つの理解が、宣長の受容した「一即多」という発想法によって、矛盾無く両立していたことを明らかにしている。

第二編においては、「橘守部の神信仰」が中心的に論じられている。第一章「橘守部の神理解」は、橘守部の神理解を検討するとともに、本居宣長の神理解を比較検討することにより、国学における神理解の変遷を論じたものである。本論考では、守部神学の課題が「神霊の実在論証」にあったことを指摘した上で、守部神学と宣長神学を比較検討し、両者の相違点と共通点を論じている。さらに、著者は、人が神を理解する契機として、「所与の聖典（神典）を通じて、あるいは自らの信仰体験（実存的体験）を基本

として認識される場合が考えられる。」と、二つの契機を指摘し、前者を宣長の立場とし、後者を守部の立場とする。そして、守部の神理解が、守部自身の「神に対するイメージ、つまりア・プリオリな神理解」に従って神典を解釈するところに表明されていることを論じている。

第二編第二章「「顕生魂」説の原由―橘守部の神学―」は、橘守部が自身の学問の深化によって、本居宣長の学説の祖述から、自らの神学確立へと至る過程を「顕生魂」説という守部独自の霊魂観に着目し論じたものである。本論考で問題となる、「顕生魂」とは、「荒御魂」を本居宣長の「神の具える異なる働きに対する呼び名」という理解ではなく、「幽世に坐します本来の御霊（和魂）が具体的にその働きを顕に示す（「顕れ給ふ」）こと」であると解釈するものである。著者は本論考において、守部の著述稿本を丹念に検討し、守部自身の敬虔な信仰と、学問の深化に伴う守部神学の課題の明確化によって、宣長の学説を批判するに至る経緯を解明している。次いで、著者は、守部の神学構造を分析し、『稜威道別』と『歴朝神異例』が相互補完関係にあったことを論証している。そして著者は、守部が、神話伝承のみならず、神社故実にも注意を払うことによって、「顕生魂」説を提唱したことを明らかにしている。

第三編では、「鈴木重胤の神信仰」が論じられている。第一章「鈴木重胤と神祇祭祀―神学確立過程に関する一考察―」では、鈴木重胤の朝廷と伊勢神宮の祭祀をめぐる議論に焦点を絞り、重胤の神学を論じている。重胤神学の特徴を著者は、「神道信仰を論ずるにあたり、神話伝承のみならず神祇祭祀の重要性をも認識し、双方に対して、対等の価値を見出した」点にあるとする。次いで、著者は重胤の神祇祭祀を重視する方法論が平田篤胤の学問の受容によって確立されたことを論じ、さらには、重胤の「神廷朝廷一体の論」確立において篤胤の暦研究が決定的な役割を果たしたことを論じている。こうした、重胤の神祇祭祀を重視する神学が明確に主張されたものとして、著者は、重胤の「修理固成」の神勅に対する解釈をあげ、重胤の大嘗祭の解釈を踏まえて、重胤の「修理固成」解釈が人間存在の重要性を論じたものであることを明らかにしている。

第三編第二章「『祝詞講義』と明治期の祝詞研究」は、鈴木重胤の『祝詞講義』が明治期の祝詞研究において、どのように受容されたのかを論じたものである。著者は、明治期の祝詞研究を概観した上で、賀茂真淵、本居宣長、鈴木重胤の業績が中心となってきたことを確認した上で、重胤の学説が久保季茲や阪正臣の祝詞研究にどのように引用されているかを具体的に検討している。これにより、明治期の祝詞研究では、重胤の『祝詞講義』が非常に重視され

ていたことを論証している。

第四編においては、「組織神学に基づく神道の神理解」が論じられている。第四編第一章では、「荒魂考」として、「荒魂」をどのように理解するべきかが論じられている。本論考では、上田賢治氏の「荒魂」解釈を確認した上で、本居宣長、橘守部の「荒魂」理解を検討した上で、神社祭祀という視点からは「荒魂」がどのように理解されるのかを検討している。本論考で注目されるのは、国学者の理解のみならず、現実の神社祭祀、とりわけ、神霊の「荒魂」を奉斎する神社の祭祀を検討することにより、守部の「顕生魂」説に、「荒魂」信仰の本義が示されていることを論じている点にあろう。

第四編第二章「〝豊受大神敬祭説〟をめぐって」では、神宮の外宮に鎮座する豊受大神を、多神信仰を前提とする神道信仰においてどのように理解するのかを論じたものである。著者はこの問題を考える上で、近世に本居宣長の『伊勢二宮さき竹の弁』に端を発する論争を取り上げている。著者はかかる国学者と神宮学者の論争を神学論争と理解し、宣長の学説を確認した上で、益谷末寿、橋村正兌の各学説を検討している。著者は、宣長の学説が古伝承に明確な根拠を見いだせないとする益谷末寿の反論に対して、古伝承のみならず、神祇祭祀や宮社の在り方をも踏まえ豊受大神敬祭説を論じた橋村正兌の学説に、賛意を表明し、「宗教は言語だけではなく、様々な表出形態を通じてその内容を示している」という理解から、「教祖の教えを中心として民族を超えて伝播する世界宗教とは構造を異にする神道は、そうした性格がより一層顕著であると思われる。」と述べ、神祇祭祀や宮社の在り方を踏まえ、神道の信仰を考える必要を論じている。

第四編第三章「多神信仰の論理―国学者の視点―」では、近世・近代の国学者の神理解を確認し、神と神との関係や、複数の神にどのように接するのか、という問題を検討している。著者は、本論考において、橘守部、益谷末寿、橋村正兌、鈴木重胤、常世長胤、といった国学者の学説を取り上げ、これら国学者の学説を検討し、国学者に見出される多神信仰の論理とは、「一即多」の発想法とは明確に異なるものであったことを指摘し、結論として以下のように述べている。

> 彼ら国学者の学説に共通しているのは、神々に於ける、個別存在の独自性や固有性というものを重視しながら、現実存在世界の修理固成という全体的な課題に対して、それら個別存在がいったいどのように秩序を形成し、そして関与するのかといった問題を、異なる着眼点から論じているのではなかろうか。換言すれば、神道信

仰の課題とは、それぞれに多様な職能を備える人の力を超えた神々の御稜威（働き）を、人が個別に畏み敬い、且つそうした神霊の御業と調和しながら生を営むことを通じて、生成発展を実現することにあるのだろう。

補論「近代神宮の道程―御巫清直の思想と古儀復興―」は、近世から近代における神宮学の泰斗・御巫清直を取り上げた論考である。これまでの清直に関する研究は、清直の考証が、如何に神宮の古儀復興や遷宮に反映されたものであるのかを明らかにすることを目的とするものが多かった。これに対し著者は清直の神宮学を思想・信仰的側面から分析することを本論考の課題として設定し、先行する国学者や神宮学者からの影響関係を念頭に置きながら清直の神宮学を論じている。そして、清直の神宮学とは、「神宮の故実を明らかにすることと、神祇に対する信仰とは、一体不可分の関係にあった」と論じている。

最後の結論では、これまでの論考をまとめた上で、今後の課題として、国学者の神道信仰確立に至る時代背景や、国学者の学説形成の契機となった神宮や神社の祭祀・故実という制度的な側面を幅広く踏まえる必要をあげ、以上のような視点から、国学者の信仰を論じることとしている。

以上、簡略ながら、本書の内容を紹介してきた、次いで若干の所感を述べたい。本書は、単に神道神学研究に留まるのみならず、神道思想史研究としても高く評価できよう。とりわけ、国学者の営みを考える上で、その信仰を重視するという視点は、従来の思想研究からは窺えない、国学者の思想を明らかにする方法であり、国学者の神道思想研究に多くの知見をもたらしているといえよう。

ただ、本書の課題としては、神道神学史において平田篤胤をどう位置づけるのかという点があげられるのではないか。近世の国学者で、現在の神道神学に大きな足跡を残した人物として、本居宣長以外に、平田篤胤があげられることは周知の通りである。とりわけ、篤胤は神道の宗教化を推し進めた人物と評価されているのであり、本居宣長、橘守部、鈴木重胤との比較という意味においても、篤胤の神信仰・神学を検証する必要があろう。

また、近年、神道神学について精力的に研究を進めている安蘇谷正彦氏に対する言及が本書に存在しないことは若干の物足りなさを感じさせる。私見では、安蘇谷氏は、現在の課題に対して、実践神学的な論考を多く著している。本書において安蘇谷氏に対する言及が見いだせない理由は、本書の目的に実践神学的な研究があまり含まれていないことによるのであろう。ただ、筆者の採用した上田神学においては、組織神学・歴史神学だけでなく、実践神学の重要

性が指摘されているのであり、本書の組織神学・歴史神学による営みが、現在のさまざまな問題に対して如何に言及しうるのか、という点も本書の課題として指摘できよう。

以上簡略ながら本書の内容について概観し、若干の所感を述べた。本書は、これまで活発に議論されてきたとは言い難い神道神学を、正面から論じたものであり、神道信仰とは何か、という問題意識を有する人々にとっては必読の書と思われる。本書の登場を期に、これからの神道神学研究のさらなる深化を期待し、書評を終えたい。

（弘文堂、平成二十一年四月、A5判、三〇三頁、本体四四〇〇円）

（國學院大學大学院博士課程後期）